

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第四章 午前二時三分〜午前三時六分

「ここですわ」とミス・ペティグールが消え入りそうな声で言いました。ジヨールがのしかかるように現れました。何も言わず、黙って腕をミス・ペティグールの腕にからませます。保護者のように守ってくれる男らしい心配りにうっとりします。こんなこと、生まれて始めての経験です。ミス・ペティグールはただおとなしく彼にもたれていました。

タクシーが次々に現れました。恋人たちが乗り込んでいきます。ミス・ペティグールはついていこうとしましたが、ジヨールががちりとつかまえています。タクシーはみんな行ってしまいました。もう一台が誘うように近づいてきます。



島田圭子画

「乗りましよう」とジョーが言いました。

「どちらへ？」と運転手が尋ねました。

「少しそこらを流してくれ」とジョーは言いました。「行き先は後で言う」

ミス・ペティグラーはいつのまにか雨を逃れ、冷え切った暗い車内に男性と二人つきりですわっていました。タクシーがぶるぶると振動します。ミス・ペティグラーも小さく震えました。怖いからではありません。わくわくと胸が躍ります。いろんな思いが入り乱れて心が沸き立ち、眩暈がしそうです。こんなことが起こるなんて。

(でもあたくし、なんにもお願いしたわけじゃないわ)とミス・ペティグラーは考えて嬉しくなりました。(この方が自分であたくしを選んだのよ。そばにいたわけでもないし。わざわざ自分から送ってくださるっておっしゃったんだわ。そんなこと思いもしなかった。この方、何か言わなきゃならないわけはなかったし。信じられないけれど、自分でそうしたかったことよ。だって他に説明のしようがないじゃないの)

あまりにも幸せで力が抜けてしまいました。でも、こんなふうに喜びに浸るのはあまり上品とは言えません。後ろめたくなりました。

「まあでも！」とミス・ペティグラー。「アンジェラはどうなさいましたの？」

「アンジェラは」とジョーは落ち着きはらって言いました。「ジョージと一緒にです。ご覧にならなかったですか？ 一台目のタクシーに乗っていきましたよ。まあ安全とはいえないかもしれんが、ちゃんと家まで送り届けますよ」

「でもアンジェラは気を悪くしませんかしら？」ミス・ペティグラーはおずおずと聞きました。

「何かプレゼントを买买いますよ」とジョー。「あの娘はプレゼントさえ買えば機嫌がいんだ」

「まあ！」とミス・ペティグラーは困った顔をしました。

「アンジェラのことには気にしないで大丈夫」とジョーが慰めるように言いました。「アンジェラもあなたのことを気にしてないでしょう」

「でも別の女性のお相手をとってしまうなんて……」とミス・ペティグラーは半分、本気で心配し、でも半分はわざと意気地のなさを装って言いました。だってこんなふうに大丈夫だと言ってもらえるのは素晴らしい気分でしたから。

「あなたのせいじゃない」とジョー。「選んだのは私だ」

突然、ミス・ペティグラーは良心の痛みを風と一緒に吹き飛ばしてしまいました。アンジェラは何もかも持っています。若さも、美しさも、自信も、もう一人の恋人も。一晩くらいジョーがいなくてもいいじゃないありませんか。

「住所は」とミス・ペティグラーが言いました。「オーンズロー・マンションの五号室ですわ」

「デリシアの住所じゃありませんか？」

「あたくし、ミス・ラフォースのところに泊まっておりますの」とミス・ペティグラー

は嘘をつきました。

「それじゃ、まだ帰れませんか」ジヨーは真面目な顔で言いました。

「まあ、どうしてですか？」不安げに尋ねます。

「邪魔をせんほうがいいでしょう」とジヨー。「あの二人はようやくくつついたところでしょう？ 少し二人だけの時間が欲しいんじゃないかな。二人でタクシーに乗って行ったのに気づきませんでしたか？」

「まあそれじゃ、あたくしどうしたらいいのかしら？」ミス・ペティグルーは心が沈んでいきます。

「簡単ですよ」とジヨーが朗らかに答えました。「少し、そこらをドライブしましょう」「タクシーで？」とミス・ペティグルーはぎょっとして言いました。

「もちろん。いけませんか？」

ミス・ペティグルーは姿勢を正しました。

「いけませんとも」とミス・ペティグルーは厳しく言い渡します。「メーターがかち回っているじゃありませんの。大変なお金がかかってしまいますわ。そんなことしていただこうなんて夢にも思いません。あたくし、足が大変、丈夫ですの。本当ですわ。あの、車を降りて、歩いて戻れませんかしら。もつ雨は上がってますでしょう。あたくし……あの、一緒に来てくださいとお願ひするのは気が引けるんですけど、暗いところはとても怖くて、それにきつと一人では帰り道が見つけれませんの」

おろおろと申し訳なさそうにジヨーを見つめます。ジヨーは低い笑い声を響かせました。

「みんながあなたみたいだったら、私も今よりずっと金持ちだったでしょうな」とくすくす笑います。

運転席への伝声管に向かって声をかけます。

「そのうち住所を言うから、それまで流していてくれ」

「そんな、いけませんわ」とミス・ペティグルーは困り果てます。

「大丈夫」とジヨー。「コルセットは非常に金になるんですよ。銀行の支配人など私の言いなりだ」

そしてゆつたりと座席にもたれました。お金を払わないのじゃなく、お金を払いすぎると言って心配する誰かに会うのは、本当にめったにない経験でした。

「本当によろしいんですの？」とミス・ペティグルーはしゃちこぼったまま聞きました。

「タクシーをおこりますよ」とジヨー。

ミス・ペティグルーも少しずつ背中を座席にあずけました。ジヨーのことですもの、自分が一番分かっているでしょう。これで裕福でないことが彼にすっかりわかってしまいました。笑われたくないけれど、でもいまさら取り繕っても遅すぎます。そして急に、もつ見せかけのふりをするのが嫌になってしまいました。

「たくさんお金のある方もいらっしやいますけど」とミス・ペティグルーはつつましく

言いました。「でもあたくし、ポンドで勘定するのがどうしてもできませんの。あたくし、いつもペンスで勘定してますんです」

「昔」とジョー。「私の一番の賢沢は、コンサート・ホールの一番安いギャラリー席だったものです」

「まあ」とミス・ペティグルーは嬉しそうにいました。「それじゃ、お分かりくださいますわね」

さつきよりもっと幸せな気分でよりかかります。冷たい一二月の風がタクシーの隙間から吹き込んできました。毛皮のコートを賢沢な気分でかき寄せます。

「寒いですな」と言うと、ジョーは落ち着きはらって腕をミス・ペティグルーに回し、抱き寄せました。

ミス・ペティグルーは見知らぬ男性とタクシーの中に座っていて、おまけにその男性があつかましくも肩に腕を回してきたのです。ミス・ペティグルーは……ミス・ペティグルーはほっと力を抜きました。座席に沈み込みます。頭をジョーの肩にもたせかけました。こんな不埒な気分になったのは生まれて初めてです。そしてこんなに幸せだったことも。もう格好をつけるのはやめました。いつの間にか、大きな声ではつきりとこんなことを口走っているではありませんか。

「あたくし四〇になります」とミス・ペティグルー。「ですけど、これまで、生まれてから一度だって、誰もあたくしを口説いた方はおりませんでした。あなたにはたいしたことないかもしれませんが、あたくしにはたいそうなことなの。とつても幸せですわ」

そしてジョーの空いたほうの手を見つけ、しっかりと握りました。ジョーは暖かく握り返しました。

「私のほうも非常にいい気分ですよ」とジョー。

「プロムフィールドさん……」とミス・ペティグルーが口を開きました。

「ジョーじゃいけませんか？」と説得するように言います。「堅苦しいのはやめましょ」

「ジョー」とミス・ペティグルーは恥ずかしそうに言いました。

「ありがとう」

「あたくしはグウィネヴィアですの」とおすおすと教えます。

「ああ、そう伺いましたな」とジョー。「もしお気にならなければ……」

「そうしてくださいまし」

「お知り合いになれて嬉しいですよ、グウィネヴィア」とジョー。

「素晴らしい一日でしたわ」とミス・ペティグルーはうなずきながら言いました。「きつとお信じになりませんわ。あたくし、はじめは他の人に起こるいろんなことを眺めておりました。でも、今は自分の中にいるんですもの。一生、今夜のことは忘れません。あなたのおかげで完璧な仕上げになりましたわ」

ミス・ペティグルーはジョーが腕を回したところのある中で、一番変てこなご婦人でした。でも、その変てこなところが、不思議な満足感を与えてくれるのです。この人は普通の女性とは違います。そしてたとえ五〇代の半ばでも、男性とは変化を好むものなのです。ミス・ペティグルーの奇妙なふるまいや、珍しい発言や、おずおずとした笑顔は、当然のことながら、今までジョーが出会ったことのないものでした。そしてそれは、何よりも心地よい満ち足りた気分を与えてくれます。(結局のところ若い顔がなんだというのだ……ただ見て楽しむだけのことじゃないか……ミス・ペティグルーが与えてくれる自信に比べたらそんなもの)

「気分はいかがですか？」と腕に優しく力を込めました。

「たいへん快適ですわ」と恥知らずにもミス・ペティグルーは答えました。

この返事はミス・ペティグルーをもっと近くに抱き寄せるぴったり口の實になりました。おまけにジョーは悪戯ではありません。ジョーはミス・ペティグルーを抱き寄せました。ミス・ペティグルーは従います。

「よろしいんですよ」とミス・ペティグルーは突然言いました。「アンジェラと一緒にいればよかったと思ってるじゃってモ」

「思っておらんよ」とジョーは重々しく言いました。「アンジェラと一緒にいたいなんて」

ミス・ペティグルーは頭を少し回してジョーの顔を見ました。さつき飲んだシェリーのせいでしょうか。それともジョーが回した腕のせいでしょうか。あたくし、こんな大胆になつたりして。

「あたくしには理解できませんの」とミス・ペティグルーは厳しい声で言いました。「どうしてあなたのような良識のある男性が、ああいう若い小娘にたぶらかされてしまうのでしょうか。結局は苦しむだけですのに。あなたが傷つくのを見たくありませんわ」

「私は」とジョーは言いました。「若い小娘にたぶらかされたりはせんよ」

「でも！」とミス・ペティグルーは疑わしげに言いました。

「それはね」とジョーは説明しました。「若い頃、私は何の遊びもなかった。パーティーもなし、ダンスもなし、女の子もなし。だから今、こうしてちょっと金と暇ができたから、少し人生や変化がほしくてね。少しばかりプレゼントを買ってやればお返しに、あの子たちはずいぶん……その、親切にしてくれる。あの若さのおかげで自分が若返るんですよ。お互いに欲しいものを手に入れる、だが私を丸め込むわけにはいかん。この私を？ とんでもない」

「よく分かりますわ」と驚いたことにミス・ペティグルーは言いました。「あたくし、これまでただの一度も楽しいことも面白いこともありませんでした。今日はいい教訓です。これまで考えもしなかったようなふまじめなところが自分の中にどっさり見つかりましたわ」

「それはいい」とジョー。「一緒に人生を楽しみましょう」

それは単なる言い回しに過ぎません。そんなことは分かっているけれど、ミス・ペティグールの目の前に、突然、幻が浮かびました。豊かで変化に富んだ、そしてたぶんちよっぴり俗っぽい人生の幻。ジョーはときどき酔っ払うことでしょう。きつとシヨックを受けることもあるでしょう。この人は洗練されてはいません。妙な人たちを家に連れてくるかもしれません。ミス・ペティグールのこれまでの基準はめっちゃくちゃになるでしょう。でも、彼がもたらしてくれる安全で守られているという感覚、そして満ち足りた気持ときたらどうでしょう！

ミス・ペティグールはジョーの顔を盗み見ました。大きくて、率直で、誠実な顔。ちよつと乱暴かもしれませんが、親切で思いやり深い雰囲気を漂わせています。ジョーは紳士ではありません。お母様が会ったらぎよつとしたかもしれません。ブラムガン夫人はもし初めにお金持ちだと聞いていなかったら、目もくれないでしょう。お父様だつてジョーを親しい仲間の中に入れていなかったに違いありません。こんな男性の関心を受け入れるなんて良家の淑女としての品位をおとしめることです。でも、たった一日にしてずいぶん墮落してしまったことですし、ミス・ペティグールはもはやジョーの育ちが悪いかどうかなど、まったく気になりませんでした。

ジョーがさつきから回している腕は、いまや疑いようもなく、温かな心地よい抱擁に変わっていました。ミス・ペティグールは、ただそこにぬくぬくとおさまっているといか言いようがありません。誰がなんと言おうと幸せです。

外の雨はまだ止まず、刺すような冷たいみぞれになっていました。雪でも雨でもなく、風が吹きつけてくる側のタクシーの窓に張り付きます。ミス・ペティグールは暖かなタクシーの中からゆったりした気持でそれを眺めていました。

「おっしゃった通りですわね」とミス・ペティグール。「出歩くような晩ではありませんわんわん」

「ひどい風邪をひいてしまいますな」とジョー。

「特にこういう今風の夜会服を着ているとね」とミス・ペティグール。

「大変魅力的だが」とジョーは如才なく言いました。「賢明とはいえませんが」

「一枚だけですもの、とても暖かではありませんわ」とミス・ペティグールは言いました。

「われわれもシルクを着ねばならんからね」とジョーが憂鬱そうに言いました。

「ウールよ」とミス・ペティグールが言いました。「人が何と言っても構いませんわ。冬にはなんといつてもやつぱりウールが一番です」

「確かにその通り」とジョーが熱心に言いました。これは重要な問題なのです。

「でもあの若い女の子たちったら！」ミス・ペティグールは頭を振りました。「なんでもかんでもシルクじゃなきゃいけないんですから。ぜんぜん暖かくないわ。どうしてみんな肺炎で死んでしまわないのかしら。ウールを着たほうがもつと綺麗に見えるつて言つたつて分からないですよ、あの子たちは。身体が暖かなら、顔色がよくなりますでし

よ。身体が冷たいと、顔がちぢかんで鼻が赤くなるんですよ」

「男はどうです？」とジョーが真剣な顔で聞きました。「私もウール派なんだ。ずっとウールで育ってきた。母がぜったいウールだ、って言うんでね。ウールのシャツとズボン下が一番だ。しかし、それを着るかといわれたら、ノーだ。着られないよ。みんなによぼよぼの年寄りだと思われてしまう。若い連中は私も同じようにシルクを着るべきだと思うんだよ。ウールを着ているところを見つかったら大変だ」

「それは」とミス・ペティグラーは呆れたように言いました。「お気に入りの若い女の子たちのことをおっしゃってるのね。まあ馬鹿な人。お年を考えなさいな。いいえ、あたくしはあなたをおだてたりしないの。あなたは若者じゃありません。そのうち必ずリユマチになりますよ。今晚、まっすぐ家に帰って、明日、何が何でも一〇〇%ウールの下着を取り寄せてくださいまし。失礼かもしれないけれど、これは言わせていただくわ。お嬢さんたちは、あなたがシルクを着てもウールを着ても、ロマンチックな気分になったりしないのよ。どっちだって同じなんだからウールを着てあったかにしておいたほうがいいの」

「じゃあなたは？」とジョーが聞きました。

「あたくしが何？」

「私といてロマンチックな気分になるかな？」

ミス・ペティグラーは赤くなりました。そして嬉しくて身体をもじもじさせました。いたずらっぽいやつとも言ってもいい表情です。(これが)とミス・ペティグラーは胸を躍らせながら思いました。(口説くっていつことなのね)こんな楽しみをこんなに長い間どうして味わおうとしなかったのでしょうか？

「あたくしは」とミス・ペティグラーはさりげなく答えます。「若いお嬢さんではありませんから」

「ああ！」と耳をすませていたジョーは高らかに言いました。「じゃ、なるってことですな？」

「そうかもしれないわ」とミス・ペティグラーははにかんで言いました。

「ぜひとも」

「そういう習慣はありませんの」とミス・ペティグラーはとんでもない勇気を出して言いました。「ハンサムな男性にお目にかかるたびにロマンチックな気分になるなんて」

「私が？」とジョーは嬉しそうに言いました。「ハンサムだって？」

「謙遜するふりしても駄目ですわ」とミス・ペティグラー。「外見を心配する必要がないこと、ご自分でお分かりですよ」

「その言葉、そのままお返ししますよ」とジョー。

二人とも幸せでした。ジョーが微笑みます。ミス・ペティグラーは心からくつろいだ気分になりました。もう一言、さりげなくだめおしします。

「ウールの下着よ」

ジョーの楽しそうな、大きな笑い声が鳴り響きました。頭の回転はいつだって最高です。

「そんなことを言うつと道を踏み外しそうだな」とジョーがくすくす笑います。「しかしその方向は正しい」

ミス・ペティグルーは澄ました顔をします。

「よし、正気に戻って明日から暖かいシャツを着るとしよう」ジョーは約束しました。ウールの下着に関する共通の信念が二人の絆になり、最後の遠慮の壁が消え去りました。二人が大事な好みを共有しているのは明らかです。ミス・ペティグルーはしっかりと彼の暖かな空いたほうの手を握りました。ジョーの腕はまだその背中に回っています。二人とも満ち足りた気分でした。ジョーにとって、五五歳というこの年齢で、女性の身体に腕を回して、相手がときめいてくれているのがありありと伝わってくるというのは、胸がわくわくすることでした。何歳も若返った気がします。ああいう大胆な若い女の子といっしょにいると、確信がもてないものなのです。

「服といえば」とジョー。「私は服には多少、詳しいんだ。仕事だからね。その黒の服装にはたった一つ、足りないところがあるな」

「あらなんでしょう?」ミス・ペティグルーはちよつとがっかりして、でもとても興味を引かれて聞きました。

「真珠だよ」とジョー。「真珠の首飾りをすれば完璧だ」

「真珠ですつて!」ミス・ペティグルーはあえぎ声を出しました。「あたくしが? 生まれてから模造真珠だつてもつたことがありますのに」

「買ってあげるよ」とジョーはけろりと言いました。

ミス・ペティグルーは身体を堅くしました。とうとうやってきました。男性がミス・ペティグルーにプレゼントを買おうとしています。これが初めの一步。重大な瞬間です。映画の中では必ず、男性が初めての宝石の贈り物を取り出すと、危ないことが起こりかけていることが分かります。ジョーはそついつ男なんだわ! ちゃんとした男性はレディに贈り物をしたりしません。宝石なんて! 宝石の贈り物には何か一癖ありそうなかすかな背徳の雰囲気があります。チョコレート、よろしい。花束、ハンカチ、豪華な夕食にお芝居、それもよろしい。でも宝石はいけません。それに毛皮のコートも。毛皮のコートと宝石は悪い男の証拠です。行い正しい女の子の警戒警報です。

「ずつとずつと」とミス・ペティグルーは言いました。「宝石が欲しいと思っ

たの。嬉しいわ」

「明日、買ってあげよう」とジョー。

「覚悟しますわ」とミス・ペティグルー。

「なぜだね?」ジョーは面食らつて聞きました。

「レディなら頂きませんもの」とミス・ペティグルー。

「あなたはレディかね?」

「そうですの」とミス・ペティグルーは答えました。

「だと思った」とジヨールは暗い声で言いました。「そうじゃないかと思ったんだ。どこか違うと感じてたよ」

「ごめんなさいまし」とミス・ペティグルーはつつましく言いました。

「それじゃ問題が少しややこしくなりますな」とジヨールが悲しげに言いました。

「そうですかしら？」とミス・ペティグルー。

「違いますか？」ジヨールが期待をこめます。

「ええ」とミス・ペティグルー。「あたくし、レディでないほうがずっと楽しいことが分かりましたの。これまでずっとレディでしたわ。でもそのおかげでどんないいことがあつたかしら？　なんにもありませんでしたわ。もうレディはやめますの」

「ああ！」とジヨールは顔を明るくしました。「それならことは簡単だ」

「ことつて？」とミス・ペティグルー。

「キスのことですよ」とジヨールがためらいがちに言いました。

「まあ！」とミス・ペティグルー。

そして大胆に言いました。「それはどうかしら」

「それじゃ……試してみるとしましょう」

そこで二人は試してみました。ミス・ペティグルーの方は、明らかにぎこちなかったけれど、ジヨールのリードはしつかりとしていて、テクニックは洗練されています。

天上のオリンピック山から地上に再び降り立ったとき、ミス・ペティグルーは別の女性に生まれ変わっていました。もう二度とうなだれる必要はありません。これで、自信を持って話すことができます。もはやなんにも知らない自分ではありません。ちゃんとキスをされたんですから。それも経験と熟練と情熱をこめたキスを。その顔があまりにも輝いていたので、ジヨールは身を正すような気がしました。

「これまでキスされたことは一度もありませんの」とミス・ペティグルー。

「それじゃ、私は幸運だ」とジヨール。「失われた時間を取り戻しましょう」

ミス・ペティグルーはびくつとしました。

「まあ大変！　時間のことをすっかり忘れていましたわ。ミス・ラフォースがなんと思うでしょう？　すぐ戻らなくちゃ」

ミス・ペティグルーは慌てだしました。ジヨールは分別のある男性です。すぐに紳士的にふるまいました。座りなおすと、伝声管をつかみます。

「オーンスロー・マンションへやってくれ」と声をかけました。タクシーはスピードを落とし、方向を変えます。

「もしよければ」とジヨール。「朝、デリシアのところへ寄って、あなたをランチに誘いたいんだが」

現実が、何千トンものレンガのように、ミス・ペティグルーの周りにがらりと崩れ落ちてきました。

「あたくし、そちらにはおりませんわ」と平板な声で言いました。

「構いませんよ。それじゃどこにいるんですか？」

「分かりません」とミス・ペティグール。

「分からない」とジョーは驚いて言いました。

ミス・ペティグールはゆっくりと座りなおしました。顔を背けます。必死で、弱々しい、情けない涙を抑えようとしました。

「あたくし、あなたを惑わせてしまいましたわ」とくぐもった声を出しました。「あたくし、あなたの思っているような人間ではありませんの。今晚の後、あなたがあたくしにお会いになりたいなんて思いませんでした。だから、あなたは知らなくていいと思っただの。でも、もう本当のことをお話しなくてははいけませんわ」

「たいていは」とジョーが用心深く言いました。「真実を話すほうがいいと私も思うが、言いたくないのなら……」

「あたくし、嘘を申しました」とミス・ペティグール。「あたくしはミス・ラフォースのお友達ではないんです」

「でも彼女はそう言ってたが」と面食らってジョーは言いました。

「ご親切にしてくださいってただけなんですわ」とミス・ペティグール。「あたくしが着てるこのドレスや毛皮。これはあたくしのじゃありません。ミス・ラフォースのです。今晚だけ貸してくださいましたの」

「それがなんの関係があるんだね？」とジョー。

「あなたをご覧になってるこの顔」とミス・ペティグールは勇気を奮って言いました。「きつと……お気に召したんですわね。でもこれはあたくしの顔じゃないの。ミス・デユバリーとミス・ラフォースがあたくしの顔の上にくっつけたんですのよ。あたくしは本当はとっても平凡で、野暮ったいオールド・ミスなの。あなたのお気に召すわけないんですわ」

「いや、好きになるかもしれませんが」とジョーは男らしく、顔を上げたまま言いました。

「今朝、たまたまミス・ラフォースのためにちょっとした御用をしたんですの」とミス・ペティグールは震える声で説明します。「それで、一日中、とってもご親切にもてなしてくださいって、今晚も連れ出してくださいましたんですけれど、あたくしのことをちゃんと「ご存じないの」

「もしよかったら」とジョー。「その、はじめから話してもらえないかな。少しばかり面食らっておるのね」

「あたくし、今朝、生まれて初めてミス・ラフォースにお目にかかりましたんです」とミス・ペティグールは打ち明けました。「お仕事をいただきに参りましたの」

その仕事がどんなものか、ジョーには話さないほうがいいとミス・ペティグールは思いました。ジョーはミス・ラフォースがどこかにしまいこんでいる子供、いえ子供たち

についてなんにも知らないかもしれません。そこで、仕事のこととはうまくごまかして、つかえつつかえ今日一日の冒険について話して聞かせました。ジョーは目を輝かせて聞いていました。感心して膝をドンと叩きます。

「なんと素晴らしい」とジョーは喜んで言いました。「あなたに仕事がなかるうがあるうがそんなこと構うものか！ 本当の住所はどこです？」そこに迎えに行こう

ミス・ペティグルーは顔を赤らめ、そしてすうつと白くなりました。辛そつに口ごもります。

「ありません。あたくし、家賃をためておりまして、今日、仕事が見つからなかったら、その家を出なくちゃありません。仕事は見つかりませんでしたわ」

「何かしてあげられることはありませんか」とジョーがそつなく言いました。

「まあ、ええ、ありますわ」とミス・ペティグルーは熱心に身を乗り出しました。「あなたはとても偉い方みたいですよ。きつといういろいろな方をご存知でしょう。大勢のお友達のうちに、お一人くらい家庭教師を探している方がいるかもしれませんわ。そうしたらあたくしの名前だけでもおっしゃっていただけませんかしら。それが仕事なんですよ。家庭教師なんです」

「いやその」とジョー。助けてあげようといったのは、もつとずつと差し迫ったお金の問題のもりだったからです。「もちろん、そうしよう」とあわてて付け足します。「きつと何か仕事を見つけて上げられると思つよ。心配しないで」

ミス・ペティグルーの顔は悲しげなほつとした笑顔になりましたが、また暗く曇ってしまいました。

「ああでも」と困り果てたように言います。「正直に申し上げたほうがいいわ。あの、何も知らないで推薦していただくのはあなたに申し訳ありませんもの。あたくしね、あまりいい家庭教師じゃありませんの」とミス・ペティグルーは絶望的に言いました。「とても簡単なお仕事じゃなくちゃだめなんですわ。前の職は、家庭教師なんて名ばかりで、子守を上品に言っただけのようなものでした。最悪のところを知っていただかないと」

「分かりますよ」とジョー。「それくらい何とでもなります」

「ご親切に」とミス・ペティグルーはどもりました。

「さて」とジョー。「一人ぼつちで私は寂しくてしかたがない」

そう言つと、ミス・ペティグルーを引き寄せて、もう一度、しっかりと腕を回しました。

二人はオンスローマンションに到着しました。ジョーはタクシーを帰し、ミス・ペティグルーと一緒に建物に入ってきました。ホールには誰もいません。夜の当番のポーターはどこかに消えています。ジョーは一緒に上に行つて、ミス・ラフォースに一言、内緒話をするつもりでしたが、ミス・ペティグルーにとめられてしまいました。

「申し訳ないのですけれど」とミス・ペティグルーはおずおずといいました。「一人で

行ったほうがいいと思いますわ。ミス・ラフォースは本当にあたくしに「親切にしてください」ださってるの。調子に乗って、招かれていないお客様をお連れするわけには参りません。それは「親切につけこむようなものですよ。あたくし、そんなことできません。きつとミス・ラフォースはお怒りになると思いますの」

「それではあなたの言うとおりによろしく」とジョー。そして男らしく、ミス・ペティグール流に、ミス・ラフォースのかんかんに腹を立てた女主人つぶりを思い浮かべようと思いました。ジョーのよく知っているデリシアはたとえミス・ペティグールが一〇人の見知らぬ男を連れて帰ってきてても、さっぱり不都合だと思わないに決まっています。私の名刺です」とジョーは断固とした口調で言いました。「明日、一二時ぴつたりここに来てください。来なかつたら探偵を雇って探させるよ。約束だ」

「まあ！」ミス・ペティグールはささやきました。「本当に、何か仕事を見つけていただけそつですの？」

「もちろん」と言ったジョーの目つきがとても意味ありげだったので、ミス・ペティグールの心臓は二拍ばかり鼓動が止まってしまいました。「何か仕事を見つけて上げられると思いますよ」

「本当にありがとうございます」とミス・ペティグールは息を切らせて言いました。「迷惑をおかけするつもりじゃありませんの……ただ……ただちょっと臆病になっておりました。仕事がないのは本当に不安なものですから」

「迷惑だなんて」とジョー。「喜んでさせてもらいますよ。もう心配は止めなさい」

「それじゃおやすみなさい」とミス・ペティグールはおずおずといました。「それから一生で一番幸せな晩をありがとう」

そして手を差し出しましたが、ジョーはそんな形式ばった挨拶には慣れていません。ミス・ペティグールは再び、暖かくたくましい腕に抱かれ、しっかりとキスをされました。

「では明日」とジョー。

ミス・ペティグールは幸福に眩暈がしたまま最初の二、三段を登りました。

ジョーはポーターを見つけてミス・ラフォースの電話番号を聞きました、一〇分間待つて、電話をかけます。

「もしもし！」とミス・ラフォースの声が答えました。

「デリシアかい？」ジョーが尋ねます。

「そうよ」とミス・ラフォース。「どなた？」

「私だ、ジョーだよ。だが何も言わんでくれ。ミス・ペティグールはいるかね？」

「ええ」

「今晚、彼女を引き止めておいてくれるか？」

「もちろんよ」

「朝になったら説明する。彼女には言わないでくれ」

「分かったわ」

「朝早く行くよ」

「あんまり早いのは嫌よ。小鳥さんはつかまえておくから」

「わかった。じゃあ」

「おやすみなさい」

ジヨーは電話を切りました。